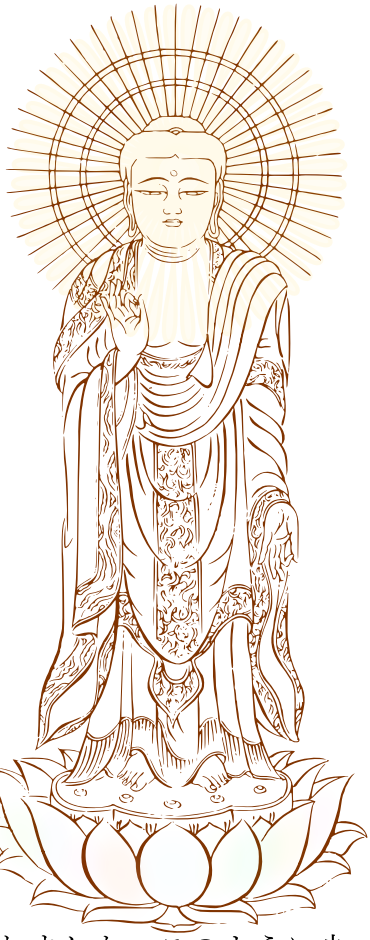
回りて向かう　～仏壇について　その四～

今回は御仏壇の一番上中央に祀られている仏様、阿弥陀如来についてお話しします。



「そんなことしたら式が台無しになるで！」、なんて言葉を一度は耳にしたことがおありかと思います。実は、台無しの台は阿弥陀如来などの仏像が乗っている蓮の葉でできた『蓮台（レンダイ）』に由来しています。つまり、この蓮の台がない仏像はその威光が損なわれているとの意味が元となり、そこから転じて、ある物事が見事には成立しないという意味で、台無しという言葉が生まれました。

その蓮を仏教では一つの象徴的な意味で捉えます。それは、誰もが泥の中のような濁った俗世に在りながらも、可憐で美しい花を咲かすことができるとする、仏教の理想としての意味合いを表します。

阿弥陀如来とは、その理想の『悟り』とも呼べる花を見事に咲かせ、以後は無量の光を放ちながら極楽浄土からあらゆる世界を照らし、極楽へ赴こうとする一切の衆生を安らけく守りつづけている仏様です。

そもそも如来とは悟りを体現した存在のことです。また、如来の前の段階を菩薩（ボサツ）と呼びます。菩薩とは悟りを求めて修行に励み、尚且つ人々を救済するために世間の中に生きる存在のことです。

という訳で、実は阿弥陀如来もかつては法蔵（ホウゾウ）という名の菩薩だったのです。法蔵菩薩は四十八にものぼる誓願（セイガン）を立て、それが全て達成されるまでは決して修行を止めませんでした。結果、阿弥陀如来になるまでには人間の理解を超えた時間が流れました。

四十八の誓願の中でも、『阿弥陀如来を信じ念仏を行うものは、すべて必ず往生させる』という内容の十八番が特に重要視されるようになり、ここから我々が特技を披露する際に使われる十八番（おはこ）という言葉も生まれました。このように少し調べてみると、現代人が普段よく使っている言葉の中には仏教から生まれたものがたくさんあるのです。

さて、そんな慈悲に溢れた阿弥陀如来は、様々な姿かたちで表現されています。右上は立像（リュウゾウ）、左は座像です。まず後背の違いがあり、いわゆる後光の射し方にもいろいろあります。皆様の御仏壇の阿弥陀様の多くは、おそらく舟をかたどった後背になっているかと思われます。

この舟に多くの人を乗せて、彼岸まで、さらには極楽浄土まで我々を導いて下さると言われています。さらには縵網相（マンモウソウ）と呼ばれる水かきで、舟に乗ることができない人々まですくい上げて下さるとも言われています。

特に覚えておいていただきたいのが、右上の立像の両手のポーズです。『施無畏与願の印（セムイヨガンイン）』といい、解り易く言えば、「大丈夫だよ、あなたをちゃんと見てるよ！」と我々の恐れを無くしてくれるのが右手の施無畏印。左手は掌をこちらに向けて指を垂らし、まるで、「手を貸そうか？」と我々の願いを成就させる為の力を与えて下さる与願印です。

左の座像の両手は『弥陀の定印（ジョウイン）』といい、極楽浄土へ全ての衆生をいざなおうとする瞑想の状態を表し、両足も結跏趺坐（ケッカフザ）という坐禅を修する時の組み方になっています。

どうでしょうか。ここでは紹介しきれませんが、仏像の姿には様々な教えや願いが込められています。ここで述べました、ほんの少しの知識を胸に留め、御仏壇の阿弥陀如来に向かっていただくのと、そうでないのとでは、やはり気持ちの入りようも違ってくるものと思われます。

次号では、その阿弥陀如来と一つになる時の悦びをたった六字で表した御念仏（オネンブツ）『ナムアミダブツ』について、じっくりお話ししたいと思います。